伝統ある獨協の新たな魅力づくりと発信を皆さんとともに

獨協学園理事長
猪口 雄二

猪口 雄二（いのくち・ゆうじ）
1955年東京都生まれ。79年獨協医科大学卒業後、同大学病院リハビリテーション科臨床研修医、81年臨床助手、84年助手。86年医療法人財団寿康会寿康会病院副院長、87年～同病院長・理事長。2017年～全日本病院協会会長、2020年～日本医師会副会長。獨協学園では、2003年～18年評議員、2018年～理事、2023年8月～理事長。

獨協高等学校から獨協医科大学の第一期生、生粋の「獨協人」である猪口雄二第15代獨協学園理事長。理事長就任に際し、「獨協に対する愛情は誰にも負けない。学園をより良くして、学生、保護者、卒業生及び教職員の笑顔と幸せのために尽くしたい」と決意を述べられたそうです。猪口先生にお話を伺いました。

学生時代について

私が通っていた頃の獨協高校は、生徒は人が好くてギスギスしていない、スポーツに長けている人、音楽に長けている人など本当に多彩な人が多く、伸び伸びした雰囲気の学校でした。先生方は厳しいところは厳しいし、50年以上前の話で時代だからということもあり、悪さをするとビンタが飛んできました。今だと問題になりますよね。いつも厳しい体育の先生が、実はとても優しい心持ちの温かい先生で、スキー教室なども一緒に行って本当に良く面倒を見てくださいました。思い出深い先生が多くて、恩師を一人に特定するのは難しいのですが、厳しくもあり温かくもある先生のことが印象に残っています。

高校卒業後、開学された獨協医科大学に運よく1期生として入学しました。当時、大学の完成した建物はありましたが、1学年100人少し程度の学生、基礎の先生と事務の方しかいなくて、皆知り合いという感じでした。何もなかったのでクラブも自分たちで作りました。音楽が好きでしたので軽音楽部を作って、スポーツは友人が有段者だったことから少林寺拳法部にも参加しました。文化祭も自分たちで始めました。

50年前の医学部で覚えなければならない物ごとの量は今と全然違っていて、医学が進歩して内容も変わり覚えなければならないことも多くなりました。国家試験の内容も変わり、今の学生さんは大変だと思います。その後、越谷に病院が出来て、今年日光の新築移転も行って、獨協医科大学は本当に発展しました。

最近訪問した他の獨協の学校も、それぞれ特徴があると思います。獨協埼玉中学高等学校は広い校地で伸び伸びと運動もできて、とても素晴らしい充実した環境だと感じました。獨協中学・高等学校は、校舎が建て替わり立派な体育館も整備されましたし、向かいが椿山荘、隣りがカテドラル教会という素晴らしい地の利を、ますます活かしていくと思います。姫路獨協大学は、土地の広さ、建物、世界文化遺産・国宝姫路城を臨む立地が良いと思いました。各学校とも充分に魅力が備わっているので、皆で努力してもっと発展していけたらと思います。

医師として

獨協医科大学で我が国初のリハビリテーション医学の講座が誕生し、すごく夢があると思って入局しました。病気で身体の自由を失った人が、機能訓練で良くなったり、100％戻るということではなく麻痺が残ったりする人もいて、いわゆる身体障害といわれる人はとても多いのですが、どうやって生活して、どうやったら仕事が出来るようになるのかそういった工夫が色々とできるところが、リハビリテーションの魅力でした。学生当時の日本にはリハビリテーションは定着していませんでしたが、絶対必要になると思い専攻しました。

1歳違いの兄も医者なのですが、下町にあった実家の病院を継がないと言い出しました。高齢だった父が大学在学中に亡くなっていたこともあり、32歳の時に実家に戻り病院を継ぐことになりました。リハビリテーション専門という訳にはいかないので、救命救急医に必要な資格を取得したり、手術の経験を積んだりして、何でも屋のような総合医になりました。その時から35年以上にわたって病院経営をしています。病院の立て直しもして、本当に色々ありましたが、病院経営の団体などとずっと関わっている中で、全日本病院協会の会長や、医療費の単価を決める中央社会保険医療協議会の委員を3期務め、3年前から日本医師会の副会長も務めています。

コロナ禍において

コロナが流行り始めて、日本に入ってきた最初の年は、コロナについて何もわかりませんでした。これは報道されているコロナだなと思う患者さんが周りに大勢いるのですが、今なら直ぐにできる抗原検査など当時はなく、重症化することもあって、大変な緊張感の中で病院を開けていました。急性期の患者さんの対応ができる大きな病院ではないので、発熱外来を設け、コロナのワクチン接種を土曜日の午後など時間を設けて実施し、高熱が治まっても体力や免疫力が低下し自宅に帰れない患者さんの入院など、後方支援を行いました。小さな病院の発熱外来では、高熱の方を検査して結果を待って次の方の準備をとなりますと、そう多くは受入れられませんから、集団で病院に来られたときに、病院の外に椅子を並べて診たこともありました。その時には、病院団体としての活動もしなければならず、コロナ対応について国との交渉事なども多くありました。

余暇の過ごし方

なかなか自由な時間を取ることはできないのですが、時間があれば音楽を聴いたりギターを演奏したりして過ごしています。バンドメンバーの6名のうち3人は大学からの仲間です。一時期仕事が忙しくて離れていた人も、30周年ライブを日比谷野音でやるからと呼び戻して再開し、遠くに住む人もいるのでメンバーを代えながら、今も年に2回のライブを目標に続けています。

学生時代はちょうど学園紛争の終わった頃で、1980年代のあまりハードではないアメリカン・ロック、イーグルス、エリック・クラプトン、ウッドストックなどに感銘を受け感化され、その後多くの音楽を聴くようになりました。1950、60年代のR&Bが好きで、モータウン・レーベルのミュージシャン、ダイアナ・ロスなどが若い頃作っていた音楽は、今でも聴く度に心に響きます。自分で演奏して似たような音は出せても、リズムまで全く同じという演奏はできません。彼らだから出来る表現なのでしょうね。

医者になってから長い休みを取ったことがないので、落ち着いたら語学を勉強し直して海外に行きたいと思っています。長期休暇には本当に縁がなくて、今はやらなくてはならないことが山積みなので、本当に休めないなと思います。映画もゆっくり観たいけれども、映画館に行くと半日潰れてしまうので、なかなか難しいですね。

学生の皆さんへ

長期の休みのあるときには、自分が好きなことを集中してやって欲しいと思います。自分の決めた仕事があって、もちろん仕事もしっかりやるけれども、人と広く付き合って、価値観や多様性が身についているというのが良いと思います。研究一筋でやってきた人も素晴らしいと思いますが、ダイバーシティの感覚がこれからの人には必要だと思います。

今年、獨協学園、獨協中学・高等学校が140周年、獨協医科大学が50周年、来年は獨協大学が60周年を迎えます。その歴史を大切にして、基本的に人間教育という学園全体で共通する理念を持っています。今後、少子化が進むなか、ますます魅力ある学校にして、その魅力を発信していかなければなりません。基本理念である「学問を通じての人間形成」をどのように具現化するかですが、それは時代とともに変化していく部分があり、高度成長期と現在の少子・超高齢化社会の中では、学問の目指すべきものも変わってきていると思います。皆さまからご協力いただきながら、獨協の色を、具体的な教育などの形に落とし込んでいきたいと考えています。

獨協医科大学

姫路獨協大学

獨協中学・高等学校

獨協埼玉中学高等学校

開設時の獨協医科大学

在学時の獨協中学・高等学校